

1. ティーム保育を考える

(1) はじめに（研究の動機、目的、方法）

私達の園では、幼稚園の園舎と小学校の校舎がつながっているというハード面での特色を生かし、幼稚園の幼児らが小学校の図工や生活科といった授業に参加したり、逆に小学校の児童らが幼稚園にきて幼児らと一緒に活動をしたりとといった「交流」を、毎年積み重ねてきた。しかし、振り返って見ると、それらの活動は「交流」レベルに終始していた感が否めない。そこでの教師の在り方は、幼稚園、小学校双方の教師がよりベストな方向を見つめながらも、単発的に活動（授業）に参加し、一緒に活動を楽しむことに終始していたり、段取りとして決められたときに全体の場で話をしたりというものだった。いわば、互いがゲストティーチャー的存在だったといってもいいだろう。私達はそこに何かしらの歯がゆさを感じていた。

たしかに、幼児らの側からすれば、小学校の授業に参加することそのものが刺激的であり、年上の人と一緒に活動することが、自身の学びへと結びつくよい経験となるであろう。その意味では価値ある場である。しかし、そのレベルで踏みとどまっていてよいのだろうか。もっと、幼児らの育ちを考慮した学びの場をつくり出していけないだろうか。私達の間ではそんな思いが日増しに強くなっていった。

はからずも、毎年の「交流」の積み重ねは、幼稚園教師と一部小学校教師の人間関係を育み、強めていた。

そこで、この背景を利用し、幼稚園、小学校という校種その他様々なしがらみを越えて、互いに腹を割って考えを出し合い、試行錯誤しながらも、幼児及び児童の豊かな学びにつながる実践を目指すことにした。その際、活動場所が幼稚園であれ小学校であれ、あるいは、幼稚園の活動であっても小学校の授業（生活科）であっても、幼稚園教師と小学校教師がティームを組んで取り組むことにした。なぜなら、私達は日常の保育の中で子どもたち一人一人をより多くの目で見て、かかわって、支えていくことが、その子の育ちや学びを保障することを、経験的に知っているからである。

(2) 実践より（97ページから105ページ参照）

- ・年度当初、1年生担任が生活科単元の年間計画について相談にくる。幼稚園教師と共に知恵を出し合い、生活科年間計画が出来上がる。
- ・1年生が生活科単元「朝顔を育てよう」の一環で幼稚園に朝顔のたたき染めを教えにくる。幼児及び児童らにはよい経験となるが、ティーム保育としては課題が残る。
- ・1年生担任と幼稚園教師が生活科単元「バスマナーについて」を共に考える。
- ・生活科単元「バスマナー」の一環で、小学校の玄関に乗合バスがくる。それを見つけた年長児数名が授業に周辺的に参加し、実際に1年生と同じようにバスに乗る。
- ・年長児が1年生から「バスののり方教えてあげるからおいで」と誘いを受ける。カードももらい、嬉しそうである。この時、年長児のほとんどが、就学時健診を終えており、小学校に目が向き始めていた。

- ・まずは幼稚園教師がバスに乗せてもらうことにする。1年生教室につくられたバスは、年長児にとっては今一つイメージが沸きにくいと判断し、幼稚園にある大型箱積み木の利用を提案する。1年生も生き生きと活動しだし、1年生教室内にバスが2台できあがる。
- ・「バスごっこ」の授業。1年生担任と年長児担任が互いに状況を見ながら意思疎通しあって、全体の場で子どもたちの考えを引き出したり、認めたりする。
- ・幼稚園の活動「ゲームランド2001」に1、2年生が参加する。それぞれの教師の認めや驚きの声かけが幼児らのやる気を誘う。教師同士のやりとりも子どもたちの前で繰り広げられることでいい雰囲気になっていた。
- ・年度が変わり、年長児が1年生となる。バスでの通学を気にした幼稚園教師が、小学校にその様子を聞きにいくと、例年に無くトラブルが少ないので驚いているという話を聞く。

(3) まとめ

年間を通してのこれらの実践から、幼稚園教師と小学校教師がチームを組んで活動に取り組んだことで一番に有効だった点は

○育ちに応じた環境の工夫

という点である。それは、幼稚園教師からの提案で、大型箱積み木を利用したバスが出来上がる事例に端的に見ることができる。1年生のこのクラスには、幼稚園出身者が約半数おり、幼稚園時代に大型箱積み木を使って遊んだ経験を十分に積んできている。彼等なら上手に大型箱積み木を使ってバスをつくることのできるだろうという幼稚園教師の側の育ちにに応じた見通しが、生き生きとした1年生の活動に結びついたといえよう。加えて、小学校の教室という、年長児にとっての非日常の空間に、自分達が普段生活の中で当たり前のように使っている積み木があるということが、年長児の安心感につながったと思われる。年長児は、1年生が積み木を一生懸命運んでいる姿を見ている。そのことも、どんな風にバスが出来上がっているのだろうという期待感につながったと思われる。

このような、育ちにに応じた環境の工夫ができた背景には、

- ・これまでに培ってきた信頼関係
- ・幼児や児童らの育ちと学びを保障しようとする姿勢
- ・それぞれの持ち味を生かした活動への参画

の3つがあると考えられる。とりわけ、信頼関係はその根幹を支えているといってもいいだろう。一朝一夕にできるものではないが、幼稚園側からの積極的な発信と、その継続が大切である。

(4) 課題

これらの実践は、幼稚園側は全体として高い意識をもって取り組んでいたが、小学校側は、一部教師（生活科の教師）とのかかわりが主となった。つまり、互いの組織同士がしっかりと手を組み、公的にその重要性を確かめての実践ではなく、草の根運動的な実践である。今後は、小学校全体との共通理解が課題である。そのためにも、これまで以上に幼稚園側からの積極的な発信が重要だと思っている。そして、ゆくゆくは幼小連携カリキュラムの作成及びそこでのTT（チーム保育）の位置づけにつなげていきたい。